

作家の徴用

都 築 久 義

白紙徴用令状

昭和十六年十一月十七日、けげんな顔をした文士たちが本郷区役所へ大勢やって来た。彼らは二、三日まえ、赤紙の召集令状ではなく白紙の徴用令書を受取り、本郷区役所に出頭を命ぜられていたのである。徴兵検査は丙種不合格で、年齢もすでに三十歳はおろか四十歳も過ぎている文士にとって、突然の徴用令書に戸惑ったのも無理はなかった。本郷区役所に来ると顔見知りの文壇人も少くなかったが、見知らぬ人が多く講堂や廊下にたむろしていた。実はここには文壇人だけでなく、画家・音楽家・写真家・映画人などのほか、新聞・雑誌・放送関係者、あるいは宗教家や商社・印刷会社の社員まで来ていたのである。それも各分野の中堅ばかりだ。やがて講堂が静まり、厚生省の役人や区役所の吏員のあいさつや話があったが、徴用の目的や任務・任地の説明はなかった。そのあと簡単な身体検査があり、甲・乙・丙・丁と印された紙片や注意書を渡され、十一月二十二日に甲と丁の者は東京の

東部軍司令部に、乙と丙の者は大阪の中部軍司令部に集合するように命ぜられたが、それ以上のことは何も知らされなかった。

いよいよ当日、甲組と丁組が東部軍司令部に集合すると、すぐにトラックで芝・増上寺に連れて行かれ、ここで点呼や部隊の編成業務が行われたが、丁組は東京に残留するということでまもなくしていなくなった。そして甲組だけがその日の夜行列車で西下し、京都で一泊したあと広島で最後の夜を送り、翌朝はやく宇品港を出航した。大阪の中部軍司令部に集合した乙組と丙組は、十日間ちかく大阪の兵舎に滞在し、十二月二日、同じ船で大阪港を離れた。また出発の遅れた丁組は年が明けた正月二日、東京を発って大阪港から目的地へ向かった。この間、麻布の第三連隊で兵営生活を送っていた。日本が米・英に宣戦布告したことを東京で知った丁組はともかく、十二月八日を台湾沖や香港沖の洋上で迎えた甲組や乙・丙組の連中が、はつきりと自分たちの行先を知ったのは日本の港を出てからのことである。甲組はフィリッピン、乙組はビルマ、丙組はマレー、丁組はジャワ・ボルネオだっ

た。

こうしてそれぞれ南方の戦地へ向かったのだが、戦況もちがえば地理的・気候条件も異っていたから、目的地に到着するまでの状況はそれぞれさまざまであった。いちばんはやく着き、かつ比較的平穏だったのは、フィリッピン組である。十二月二十四日にリンガエン湾に上陸したあと、十七年一月二日に占領した二日後にマニラに入城した。

マレー組も二月十五日に陥落した翌日にシンガポールに入城している。マレー組はサイゴン（十二月十八日）までビルマ組と一緒にだったが、サイゴンで輸送船を乗り換えてマレー半島・シンゴラに行き、そこから陸路であちこちに滞在しながらシンガポールを目指した。一方サイゴンでマレー組と別れたビルマ組は、トラックでカンボジアのプノンペンに行き、次は汽車でタイのバンコックまで行った。しかしバンコックで二ヵ月ほど待たされた。日本軍がタイから続いてビルマに侵入したのは一月下旬だったが、首都ラングーンを制圧したのは三月八日である。前線部隊がラングーン入城まぢかいことを知って、二月下旬バンコックを出発し、密林地帯を突破してラングーンにたどり着いた。ジャワ組は前線部隊と行動を共にして敵前上陸を敢行したので最も悲惨な目にあつた。今村均中将の率いる第十六軍は、二月二十七日からジャワ島沖で激しい海戦を展開し、三月一日に上陸したが、その矢先、宣伝班のうち浅野晃、阿部知二、大木淳夫、大宅壮一、富沢有為男らが乗っていた輸送船が、敵の魚雷に命中して撃沈し海中に投げ出されたのである。重油の海を泳ぎ切つて助かったものの、文字ど

おり九死に一生を得たわけである。ついながら武田麟太郎や北原武夫は別の船で助かったようだ。

いずれにしても作家が大挙して徴用され、軍隊に所属して軍務につくなどということは日本の文壇史にとって未曾有のことであったが、日本の軍部が小説家をはじめいわゆる芸術家・文化人を徴用して活用しようとしたのは、すでにドイツが第二次欧州戦争で採用していた宣伝中隊・PK部隊を模倣したためだといわれているが、そのあたりの経緯と事情は自らも第十六軍の宣伝班長を務めた町田敬二中佐（当時）が、『ある軍人の紙碑』（美谷書房 昭53・11）で次のように述べている。

開戦の前年（昭和十五年）ドイツに派遣された山下奉文軍事視察団の報告書にもとづいて発想したものであった。……昭和十五年七月、大本営は『世界情勢の推移にともなう時局処要綱』を決定して、従来の北進政策を一転、突如、南進政策の基本姿勢を打ち出した。……翌十六年九月になると、いよいよ対米英戦争は必至の形勢になったので、参謀本部第八課（白井茂樹大佐課長）は、新作戦の準備の一つとして、対南方作戦の宣伝班の編成に着手した。……南方作戦に配属される宣伝班の編成、装備は、むしろ作戦地域の特性によって多少の異同はあつたが、第二十五軍（マレー）、第十六軍（ジャワ）、第十四軍（フィリッピン）、第五軍（ビルマ）の四作戦軍に、それぞれ一隊ずつ配属されることになった。当初、各隊の要員は百五十名とし、人格、識見ともに優れた有名

文化人で編成する方針をとり、戦争というものに特にレジスタンスの強い、これらの人々に徴用令状を発送しはじめたのであった。彼らに課せらるべき任務は、占領の住民に対する宣伝宣撫、対国内報道はともかくとして「作戦軍将兵の啓蒙」という困難な一項目が伏在していた。ところがそんな条件を満たす要員が、百五十名編成の四隊、六百人もそうそう見つかるわけはなかった。そこで人選は手当り次第（？）となり、辛づる式に別の人物を聞き出すか、自薦、他薦さまざまで、頭数をそろえるべく『旋風』と相成った次第である。

支那事变当時の内閣情報部によるペン部隊の派遣（昭和十三年九月）とは、目的も規模もちがう今度の宣伝班の人選がどのようにして行われたかに関心があるが、町田敬二のいうように（辛づる式に別の人物を聞き出すか、自薦、他薦さまざま）だったというのはいささか理解しがたい。今回の企画は極秘裡に進められたはずだし、少くとも第一次徴用組の文学者たちは突然の徴用に戸惑っているからだ。といって顔ぶれを見ると、文学的閥歴や思想的立場はまちまちで、人脈的にもつながっているとも思えないので、人選にあたってとくに基準や根拠があった様子もうかがえない。したがって興味と関心はあるが、今のところその真相は不明である。

それはともかく、町田敬二のように徴用する側（厳密に言えば彼もそうではないが）ではなく、徴用された側の尾崎士郎はこの宣伝班の

作家の徴用（都築久義）

ことを次のように『小説四十六年』（講談社 昭39・5）で回想している。彼は第一次徴用組としてフィリップピンに派遣され、出発当初から班員のリーダー格だった。

あとになって聞いてみると、そのころドイツにP・K部隊という名前で「戦う宣伝中隊」と呼ばれた部隊が発生した。この部隊は占領地帯の後から乗りこんでいって一国の政治機能を変革し、新しい文化をうちたて、もっとも近代的な能力と内容を持つ国家を形成するに足るだけの人間的要素によって成り立っている。

ドイツではこいつが相当に効果をあげたらしいが、日本の参謀本部第八課（通常謀略課といっている）はすぐさまこの計画を日本の軍隊の中に軽々しくとり入れた。これがすなわち急速に形成された私たちの宣伝部隊なのであるから驚くのはおかしい。この宣伝部隊は各地域別に約百人くらいの人数をもつて構成され、陸軍文官としては一つの地位を与えられていたけれども、肩章だけは与えられなかった。

軍隊というところは肩章がものをいう世界である。どんなつまらぬやつでも肩章さえつけておれば序列に従って整然たる權威を生じてくる。戦場へゆくにつれて肩章は存在を發揮してくる。肩書のないやつが任務を帯びて戦場へ出かけ「おれは陸軍中佐待遇だ」なぞといったところでだれひとり本気にはしないであろう。私たちの戦場生活はまったくこの肩章のないために時によつては

雑役夫や馬丁にまちがえられたことさえあった。

フィリッピンの宣伝部隊

大東亜戦争に宣伝班を編成して投入したのは、対敵宣伝や国内報道もさることながら、占領地域における文化工作や文化建設が主要な目的であり、参謀本部のねらいであった。しかし最初に徴用された宣伝班員の多くは、徴用期限の一年がきたり健康を害して昭和十七年の暮までに帰ってしまったから、彼らは現地では本来の役割や任務をほとんど果たさなかった。ちなみに日本軍の南方進攻作戦が勝利を収めて一段落したのは、昭和十七年五月一日のマンガレー（ビルマ）の占領、五月七日のコレヒドール島（フィリッピン）の米軍降伏のころであり、それ以後、宣伝班も陸軍報道部と改称し、本格的な占領政策や文化工作が始まった。

占領時期や占領状況が地域によってまちまちであったから、宣伝班の活動内容も地域によって異っているので、ここではいちばん初めに占領地に上陸したフィリッピンと、いちばん活躍が目立ったマレーの宣伝班の実状を述べておく。

文壇関係でフィリッピンに徴用されたのは最初が、石坂洋次郎、尾崎士郎、今日出海、寺下辰夫らで、第二次徴用として上田広、沢村勉、柴田賢次郎、火野葦平、三木清らが十七年二月下旬に現地に来た。宣伝班の組織系統は正確なところはわからないが、当初は文芸班・絵画

班・映画班・写真班・新聞班・放送班・宗教班……といった具合に出身・専門別にグループを編成し、全体のいわば執行部的な存在として企画班があった。企画班のメンバーは尾崎士郎・佐坂正平（放送）佐藤喜四郎（新聞）、向井潤吉（絵画）の四人に、軍側から班長として望月重信少尉（当時）が加わっていた。この編成はフィリッピン派遣軍宣伝班長勝屋福茂中佐（当時）や望月少尉らが合流した台湾出航以後に決められたようである。宣伝班がマニラに入城したのは前述のように昭和十七年一月四日。日本軍がマニラを無血占領した二日後である。宣伝班員の大半はペー・ビュー・ホテルが宿舎にあてられた。マニラ湾が一望できる九階建のホテルだ。宣伝班の本部も最初はこのホテルにあったが、まもなくしてイギリス人が使っていたマニラ倶楽部に移った。宣伝班員たちは毎日ホテルからこの事務所に通った。そしてさっそく占領対策活動を始めた。絵画班は安民ポスターをかき、新聞班や放送班は新聞社や放送局の再建と宣伝原稿を製作し、今日出海たちは映画館の再開や映画の収集に奔走した。

こうしてマニラでは占領活動が着々と進められ、マニラ市内は平穩であったが、米軍がフィリッピンから完全に撤退したわけではなかった。主力部隊はバタアン半島に退散しただけであり、米軍の要塞コレヒドール島は建在であったから、この二つを攻略しないかぎり、フィリッピンを制圧したことはない。日本軍がバタアン半島に総攻撃をかけて鎮圧したのが四月十一日、コレヒドール島の米軍が降伏したのは五月七日である。宣伝員はこの間に前線を視察したり、対敵宣

伝用のピラを作ったりしているが、バター半島総攻撃の際は大勢の宣伝班員も行った。とくにコレヒドール作戦には火野葦平、上田広、柴田賢次郎をキャップにして三方面に分れて従軍した。

精力的に前戦へ出かけたり、各地を宣撫工作のために飛びまわっていた者は多忙を極めていたであろうが、尾崎士郎のように企画班で本部詰めだったり、積極的に動こうとしなかった者はこの生活に無聊をかこっていたことも事実である。尾崎士郎の『戦影日記』（小学館昭18・5）を読むとそのいったんがうかがえる。

三月二十七日

マニラ本部へかへる。二十八日。二十九日。三十日。空々閑々。低さに堪へず。未だ戦場の悟境に達せざるなり。

五月二十八日

昨夜大酔の為め疲れ、一日休養しようと思つてゐるところへ出勤の準備をした池田（禎治）と今（日出海）が誘ひに来たので一緒に本部へ出かける。……うつらうつらして正午近くまで過し午后宿舎に帰る。……マニラなるベ・ビュー・ホテルの一室に今日も鏗節を削りて暮す。

六月二十七日

この地つひに予の心を埋むるに足るものなし。マニラ人名簿をつくりて自ら慰めんとす。

七月十日。十一日

作家の徵用（都築久義）

雨降りつづく。バタアンの戦場を彩る新緑のことなぞしきりに思ひつづける。

尾崎の日記には七月十六日の項に「班長室にて、報道部組織の相談あり。宣伝班は報道部と改称し、軍政部の中に編入されることとなりたり」とあるから、この日から従来の宣伝班はなくなつたわけである。そして七月三十一日の項には、「午前十時より企画会議開催さる。題目。(1)日本語の美しさ(宣伝方法) (2)東亜共栄圏内公用語としての日本語について」とある。前野和久「マナベ・ニッポン語」(『神聖国家日本とアジア』勁草書房 昭59・8所収)によれば、十七年六月一日から国民学校が開校し、そこで日本語の時間を設け、さらに九月から教員訓練所を開いて小学校教員の再教育を行なつたそうだが、尾崎の日記にも、(九月十一日、午前十一時より、小学校教員再教育の講習会に臨む)と出ている。また十月二十日の内地の新聞は、朝日(ジャワ)・毎日(フィリピン)・読売(ビルマ)・同盟他(マレー)の新聞・通信社が南方占領地で邦字新聞を発行し「南方文化建設の第一線へ」(読売報知)乗り出すことを報じている。いよいよ占領地における文化工作が始まつたのである。

しかし、尾崎士郎の日記には「十月一日。いよいよ帰還と決定す。」と出ている。すでに九月四日の項で「数日前、内地へ帰還したる今君一行中……」の記事もある。石坂洋次郎もその後を追つた。第一陣の宣伝班たちはそのころから続々と帰国した。日本語教育にしても現地

での邦字新聞の発行にしても、それぞれ専門家が派遣され、もはや文壇人の出る幕はなかったのである。

昭南日本学園

日本が占領した南方の四地域のなかで、最もはやくから安定していたのはマレー方面・シンガポールであった。昭和十七年二月十五日、イギリス軍が降伏すると日本軍はただちに入城し、シンガポールを昭南市と呼称することを決定した。マレー作戦の主力部隊の後を追ってきた宣伝班も陥落の翌日に到着している。マレー方面に派遣された第一次宣伝班員のうち文壇人は、井伏鱒二、小栗蟲太郎、海音寺潮五郎、北町一郎、里村欣三、寺崎浩、中村地平などであったが、途中で海音寺潮五郎はクアランプールに、寺崎浩はベナンに残留を命ぜられた。

宣伝班の宿舎はフィリップン組のように豪華なホテルではなく、日本軍が接収した住民の邸宅がわかれて分宿した。井伏鱒二の当時の日記「南航大概記」(『花の町』文芸春秋社 昭18・12所収)には、
(二月十六日 シンガポールに来る。宿舎は町はづれのナツシム・

ロード。植物園の裏口に近い。爆風で屋根が痛んでゐる)としか記されていないが、戦後の回想「徴用中のこと」(『海』昭52・9)では、

私たちの宿舎は軍の接収したスイス人の豪壮な邸宅だが、母屋のスイスたちはどこかへ逃げて行つたといふことで、車庫につづく

別の棟に運転手の一族が残つてゐた。その運転手も車ごとに接収されて、新聞社に通勤する私たちの使用に任されることになつた。

と書いている。ここに第二次徴用組の中島健蔵や神保光太郎を迎えたが、彼らが来るとすぐに三人一緒に別の家へ移つたようだ。宣伝班の事務所も(この昭南市で一ばん大きな建物をカセイ・ビルといふ。周囲やアパートや民家や商館などに較べ、ばかばかしく大きな図体に見える十四階の大建築)と井伏鱒二が「花の町」で紹介した所に後で移つたが、当時はナツシム・ロードに設けられたらしい。井伏鱒二らが最初に命ぜられた仕事は現地で発行されていた新聞の責任者。井伏鱒二はストレイト・タイムスと呼ばれたシンガポール最大の英字新聞(接収後は昭南タイムスと改称)、そして(マレー語新聞の編輯責任者は、英語はよく出来るがマレー語を知らない詩人の北町一郎で、印度語新聞の責任者は、内地で新進作家とされてゐるが印度語を知らない中村地平である。華字新聞の責任者は楯岡といふ男であつた。)(前出「徴用中のこと」)。

しかし宣伝班の活動が本格的に始まり、宣伝班の本領を發揮するのは、中島健蔵や神保光太郎らの第二次徴用組がやって来てからである。神保光太郎の『昭南日本学園』(新教出版社 昭18・8)によれば、彼らが大阪に約一ヵ月滞在し、日本を發つたのは昭和十七年二月十八日、昭南港に入港してそれぞれ分れて宿舎に入ったのが三月十七日であ

る。三月の末まで定った仕事になかったが四月二日に中島健蔵に「教育視察を命ず」の命令がくだり、神保光太郎もときどき彼に同行して学校巡りをやっていると言伝班の編成替えがあり、二人とも企画部に配属された。そして、中島君などの主唱で、宣伝班の平和建設の為の仕事として、先づ第一に日本語運動を開始することに決定し、これと前後して、宣伝班の副班長であつたO少佐の發議で、日本語学校が開設されることになり、(日本語の学校は、私(神保)が直接経営を委任)されたのである。時を同じくして軍政部は天長節を祝い、日本語普及運動を宣言した。

日本語普及運動実施要領は五月十七日に決つた。『昭南日本学園』(前出)にはそれが資料として載っている。

一、目的

馬來半島及「スマトラ」島住民ニ対シ日本語ノ普及ヲ計ルニアリ

二、名称及期間

六月一日ヨリ同七日迄ヲ日本語普及運動週間トシ爾後本要領ニ

基キ続行ス

三、標語

マナベ使へ日本語!

となつており、実施項目として、伝單・ポスターの作製、新聞・小冊

作家の徵用 (都築久義)

子、放送、映画・演劇・音楽、店頭利用などがあげられ、それぞれ具
体案が数ヶ条ずつ出ている。

日本語学校の方は五月一日に昭南日本学園が開校し、五月九日に神保光太郎が学園長に就任した。この学校は成人を対象にした二、三ヵ月の速成教育機関だったが、第一期生を募集したときには十一歳から五十二歳まで三百人を越える応募者があつた。八月六日の第二期生の受け付けに際しては、年齢を十六歳から二十五歳までに制限し、定員も二百五十名とし入学試験も実施したが、二千五百人もの応募者があり、午前の部と夜間の部をそれぞれ二百余名ずつ合格させた。さすがに十月初めの第三期生の募集は夜間の部を廃止したこともあつて志願者数は七百余人に減つたとはいえ、昭南日本学園の人気と評判のほどはうかがえよう。

昭南日本学園では現地の一般住民だけではなく、小学校の先生を対象に教員講習会も開いていた。(授業は午後、公学校が終へた頃、四時から五時過ぎまで、多人数なので二班に分け、それぞれ毎週三回とし、教師には、K君と私とが当ることになつた)と神保光太郎は述べている。ただしこの教員講習会には特別講師として井伏鱒二が日本歴史を講義しているのが興味深い。彼の「昭南日記」(「文学界」昭17・9)にも(六月十八日、午前中は昭南日本学園の歴史講義ノートをづくり……)と出ているから相当に張切つていったようだ。昭南日本学園は開校して半年後の十月末に廃校し、軍政監部文教科に移管したが、たとい短期間であつたにしろ、宣伝班の主體的な發議と企画で日本語学

校が運営された占領地域はなかった。神保光太郎は同著で〈宣伝班といった存在が、作戦地としての昭南から、生産都市としての昭南へ移る間の、過渡的なものであったと同じく、日本語運動といった名称で表現できる日本語普及の努力も、今、その過渡的な一時期を脱して、それぞれの部門で実を結び出した……〉と言っているが、シンガポールの宣伝班こそはその役割と任務を果し、日本軍の期待に見事に応えたといえよう。

井伏鱒二「花の町」

陸軍宣伝班員として南方へ徴用された作家たちは、昭和十七年暮までに徴用が解除されて帰国すると、戦地での体験や見聞を雑誌に発表しやがて出版した。それは支那事変の当初に大勢の文学者が戦地へ出かけたときと変らなかつた。しかし大東亜戦争下では宣伝・宣撫・報道にあらゆる分野から動員され、彼らのほとんどがその体験や見聞を書き、本にまとめたから、氾濫した現地報告や従軍記・戦記の書き手の顔ぶれは実に多彩だった。これらの文献は、今では入手が困難で正確な数字は定かでないが、戦争文学文献の蒐集家として知られる高崎隆治の「戦争文学文献目録」、(「戦争文学通信」風媒社 昭50・12)にざっと目を通し、南方や太平洋海戦の現地報告・従軍記・戦記と思われる著作を拾い出してみると、昭和十七年一二〇点あまり、うち著名な文学者のものは三〇点にも満たず、昭和十八年は約一五〇点のう

ち三〇点を越える程度、昭和十九年は一四〇点くらいのなかで二五、六点だから、文学者以外のものがいかに多かったかが推測できる。

大東亜戦争下では宣伝・報道における軍部自らの活動が日立つ。宣伝班員や報道班員を戦地に派遣したり、文献・資料を検閲しただけではなく、当局自身が編纂、企画・協力して戦記や現地報告の刊行をしたり、マスコミ・ジャーナリズムに登場する積極的な姿勢を示したのである。海軍報道部はいちはやく「大東亜戦争と帝国海軍」(興亜日本社 昭17・5)を編纂して以下「海軍戦記」を第四輯(昭19・6)まで逐次刊行し、同時に海軍報道部が監修して「ハワイ・マレー沖海戦」(文芸春秋社 昭17・5)から「南太平洋航空戦」(同 昭19・11)まで「海軍報道班員現地報告」全五巻をまとめた。また海軍の外郭団体であったくろがね会(昭和十六年八月結成)は、海軍報道作家前線記録を二冊(「進撃」博文館 昭17・12「闘魂」同 昭18・2)を出版している。そしてはやばやと、「大東亜戦争開戦史」全二巻(東京日日新聞社 昭17・12、昭18・12)を編纂した。

一方、陸軍側はまず文化奉公会に委嘱して「マレー電撃戦」(講談社 昭17・6)を皮切りに「従軍随想」(同 昭18・6)まで全六巻の「陸軍報道班員手記」を刊行した。文化奉公会は昭和十六年七月、支那事変の帰還作家が中心になって結成した文学団体である。また比島派遣軍報道部は独自に、「比島戦記」(文芸春秋社 昭18・3)を発行している。陸軍の方も南方作戦が一段落すると、「大東亜戦争」を企画した。ただしこちらは「比島作戦」(読売新聞社)、「ビルマ作戦」(同盟通信社)、

【ジャワ作戦】（東京日日新聞社）、【マレー作戦】（朝日新聞社）をそれぞれの新開社が編纂して昭和十七年十一月にいっせいに刊行した。その他この戦争では現役の将校がマスコミ・ジャーナリズムに頻繁に登場し、作戦参謀や指揮官が戦果や戦況を語ったり自ら筆をとったことは異例であり、たといその内容に誇張や虚偽があったとしても、戦記の氾濫に拍車をかけたのは事実だ。

このように大東亜戦争下ではあらゆる分野で現地報告や戦記が書かれたために、文学者のそれは相対的に数も少なく、しかも派遣された地域の事情に多少の差はあったにせよ、体験や見聞したことは大同小異だったから、丹羽文雄の『海戦』（中央公論社文芸賞 昭18）や豊田三郎の『行軍』（文学報国賞 昭19）のように文学賞を受賞した作品はともかくとして、文学者のものが格別に評判がよかったり話題になるということとはなかった。しかし、井伏鱒二の『花の街』と尾崎士郎の『人生劇場・遠征編』はともに新聞連載小説であり、前者は戦後も評価が高く、後者は題材が異色であるのでここでとりあげてみたい。

『花の街』は東京日日新聞（大阪日日新聞も併載）に、昭和十七年八月十七日から十月七日まで連載され、昭和十八年十二月、文芸春秋社から上梓されたときに『花の町』と改題された。シンガポール滞在中に大本営から直々に小説執筆の依頼があり、現地から原稿を送って新聞に連載した。彼が連載に先だつ「作者の言葉」（八月十三日）で、

昭南市はいま非常に平和である。非常によく治まつてゐる。嘘で

作家の徴用（都築久義）

はないかと思はれるほど平和である。……私はこの市内における或る長屋の或る一家族を丹念に描写して、疑ひなくこの街の平和を信ずる市民のあることを一つの資料としたいのである。

と述べているとおり、これは日本軍宣伝班事務所のあるカセイ・ピルの近くの長屋に、母のアチャンと姉のトミーの三人で住んでいる中国人の十五歳の少年ベン・リヨン一家の話である。宣伝班員木山喜代三は骨董屋で昭南日本学園の秀才・リヨンに出会い、彼が見つけた掘出し物の骨董にまつわる忌しい話を聞かされた。それは日本軍が攻めて来て密林に逃げたとき、自分は日本軍をよく知っているから金を出せば保護してやると言い寄って来たマライの青年が置いていった品で、青年は今だにベン一家にまといついているという。そのことを聞いて木山は不愉快になり、真相を確かめようとリヨンの家を訪ねると、案の定くだんの青年は日本兵を連れてやって来た。事情を聞くとこの家の婦人が病気だから助けてほしいと兵隊さんを引張り込んだらしい。青年は日本兵とこの婦人を結びつけようとたくらんだのである。それを知ってさすがの兵隊さんも怒り出し、今後は青年が近寄らないように厳しい処置をとると話す、婦人は兵隊さんに心から感謝した。それからしばらくたってリヨンが木山の宿舎を訪ねて来た。就職で世話になった学園長にお礼がしたいと言う。そしていま長屋では日本にあるような隣組を作る相談がもちあがっていると話し、帰り際に母からあの兵隊さんに渡してほしいと預ってきたと言ってお寺のおみくじを

置いて行った。兵隊さんのお守のつもりだったのである……。

「花の街」には激しい戦闘場面も戦争の傷跡も出てこないし、露骨な皇軍讚美や聖戦思想が語られていないために、たとえば小沼丹の（こ）には軍に迎合したところもなく、時流におもねる気配も微塵もない。自らの文学を守る純粋な作家の姿がある（集英社版『日本文学全集41・井伏鱒二集一昭42・9』）といった解説が生まれ、東郷克美の次のような評価が出てくる。

おそらくは考えられる最悪の非文学的条件のもとで書かれたものではあるが、戦争のもたらす荒廃の影がまったく落ちていない点で稀有の佳作である。……占領地での従軍生活というものはおそろしくいかなる人間にも一種の精神的荒廃をもたらさずにはいないものだろうが、井伏鱒二にはついにそのようなものとは無縁であった。……

「花の町」は戦地で執筆されたにもかかわらず、井伏鱒二の戦争に対するみごとな不在証明になりえている。

〔戦争下の井伏鱒二（国文学ノート）12号 昭48・3〕

しかし、もともとこの小説は作者もいうように平和な昭南市、よく治っている昭南市の様子を描こうとしたのであり、当日の新聞の社告にあるとおり、（戦争の渦中にあつて明るい希望を抱いて起ち上る昭

南市のある市民のささやかな生活面を主題）としたのだから、戦闘場面は必要ないし戦火の傷跡を描いてはいけなかったのである。ここにはたしかに誇張した皇軍讚美はないけれど、優しい日本の兵隊さん、親切で立派な兵隊さんと現地婦人の美しい交流や美談を描くことによって、さりげなく皇軍兵士が讚美されていることを見落してはならない。

ここにはまた聖戦思想の強調はないけれども、日本昭南学園の卒業式の演説で、前の盟主イギリスの教育政策を批判したり、カセイ・ビルにやって来たリヨンが、（木山さん、このビルデングは戦争の前とちがひます。昔は英国人のほかには、ここには来ることができませんでした……）と語ることによって、イギリス植民地時代の悪政と日本占領下の善政が暗示されている。リヨンの家では日の丸を額ぶちに入れて飾っているが、それについて母のアチャンは次のように説明する。

私どもは、このやうに信じます。貴官たち日本人の立場から御覧になれば、いまや馬來の住民一般が、日の丸の旗を大事に保護してゐるといふことは公然の事実であり、住民の美拳である。それを批判する当人が敵性人でない限り、それは誰も非難すべき筋合ひのものではない。なぜかといふに、馬來は日本の領土の一部である。私はそのやうに信じてゐるのでございます。

これを聞いて木山に異論のあるわけはなく（彼は「同感です」とつ

い日本語で答へ、壁の日の丸の旗に目を向けた」という記述や、昭南日本学園の神田幸太郎園長が、志願者が殺到していることを誇らしげに話すくだりには、シンガポールでは日本占領政策が浸透して現地住民に支持されているという様子を、読者に知らせようとする作者の意図が如実に出ていよう。井伏鱒二には軍に迎合しようとか時局におもねる気配はなかったとしても、宣伝班員として戦地に派遣された彼に、大本営が何を期待して直々に小説の依頼をしたかは十分に承知していたはずだし、書いてはいけないことも書かなければならないこともわきまえていたはずだ。だからこそ彼は銃後國民が知っては都合の悪いことは決して書かずに、ひたすら昭南市が平和でよく治っていることや占領政策の正当性や宣伝班の活躍ぶりだけを書くことによって、大本営の期待に応えたのである。

むろん日本軍が占領直後にシンガポールで華僑の大虐殺があったことを彼は目撃しているし、その余韻が長く尾をひいていることも身を持って感じていた。そしてなによりも、〈植民政策ということにぜんぜん考慮がはらわれていなかった〉とか〈日本のやり方では、あれじゃあもちこたえられないですよ〉（昭和十年代を聞く）『季刊文学的立場』昭45・9）の発言に見られるように、日本の占領政策に疑問を抱いていたのである。にもかかわらず、日本の占領政策を讚美したかのごとき「花の町」を書いたとしたら、いったいどこに〈戦争の不在証明〉があるう。〈戦争のもたらす荒廃の影〉は歴然としているのではなからうか。

作家の徴用（都築久義）

尾崎士郎「人生劇場・遠征篇」

尾崎士郎の「人生劇場・遠征篇」は、昭和十八年五月六日から十月二十九日まで東京新聞に連載された。「遠征篇」は昭和八年三月に発表された「青春篇」から「愛欲篇」、「残俠篇」、「風雲篇」と続くシリーズ五作目であるが、その題名が示すように作者が宣伝班員として徴用されフィリップピンに「遠征」したときのことを書いたものである。宣伝班員として南方に徴用された作家たちが、その体験や見聞を随筆的に記したり、現地で見聞した話を創作風に書いた作品は少なくないが、これは宣伝班・宣伝部隊そのものを題材にしている点で異色であり、しかもいわゆる大本営発表調の内容ではなく、むしろ大本営にとっては不都合な事実や実態を描破している点は注目に値しよう。

「遠征篇」は宣伝班の一行がフィリップピンへ向かう輸送船のなかの様子から書き始めている。船底の将校室をあてられた宣伝班員たちは毎晩のように酒盛りをしている。これが最後だと言っては誰かがどこからか酒を調達してくる。彼らが輸送船のなかでいかに（なまくら）であつたかは、上陸するやいなや指揮官の高月小尉が（はいよいよ戦場に第一歩を踏み出したのだ、今までのやうな、なまくらな態度であることは絶対に許さんぞ）と訓示しなければならなかったことで推察できる。しかし彼らは上陸してからも酒盛りや宴会をやめたわけではなかった。マニラに無血入城し、豪華なホテルを接収して宿舎にしたので、先住者が残っていた洋酒や缶詰類が飲み放題、食べ放題だっ

たのだ。

宣伝班は確たる指導理念や運営方針が決まらぬまま急造され、もと個性の強い芸術家やジャーナリストの混成部隊であったため、隊員どうしの小ぜりあいや反目はたえず、指揮官が（今参謀本部から命令があつて、宣伝部隊の規律について特に注意してもらひたいといふことでした。先づ上官に対する敬礼をすること）と訓示をすれば、（唯今、少尉殿は上官に対する敬礼を厳守せよと申されましたが、われわれはいかなる階級に属するかといふことを知らないものであります……）と指揮官にまでやり返えし、指揮官もまたその返答に当惑する始末だった。実際のところ彼らの身分階級は定つていなかったようだ。それでもまだマニラ占領後もしくは、バタアン半島やコレヒドール島で激しい戦闘が展開されていたから、敵対宣伝に集中するという目標もあれば緊張や自覚もあったが、それが終了してしまうともはや皆んなで集中する仕事もなければ、共通の目標もなくなつてしまつた。そこで各班や個人の判断で積極的に仕事をするところもあれば、前引の「戦影日記」に尾崎が書いたとおり、宿舍のホテルで饜節を削つて日がな一日を暮しているような者もあり、おたがいの仕事ぶりの批判や誰某の非難が始まるのである。指揮する側にもはっきりした方針や方法がなかったから、それを指導し統率することもできなかった。

この作品には宣伝班の現実生活をありのままに記録しただけでなく、当時のマニラの実態も随所に点描されている。マニラは南方地域では日本軍が最初に占領した都市であり、アメリカ軍は無抵抗の状態

で退却したので町は平穏で占領政策も現地民に支持されているかに見えた。ところがバタアン半島の攻撃に従軍すると、（このあたりの住民たちには、ほとんど日本軍の威力は認められてゐなかつた。……軽々しく日本軍を信頼してリパの町へ帰るとしても、やがてアメリカの大軍が押し寄せてくるであらうといふ予想が彼等を動きのとれない感情の中へ追ひやつてしまふのである）というのが実態だった。そして例の高月少尉が、（長い年月にわたるアメリカ政府の謀略によつて、いかにフィリッピン人が東洋民族としての伝統と誇りを失つたか、諸君は反省すべきである……）と耳ざわりのよい東洋のフィリッピンを強調する演説をしても、現地人の通訳は日本軍は決して泥棒はしないと云つた調子で現地民に伝えたという。独立運動の志士と称する連中が右往左往したり、得体の知れない人物が宣伝班で話題になるなど、日本の占領政策が決して滲透していなかつたことをこの作品は十分にかがわせる。

このように「人生劇場・遠征篇」が、宣伝部隊の実態やフィリッピンの実状を暴露的に描出しているとはいへ、もとより作者に反戦的な意図があつたというのではない。むしろ徴用を自分の宿命として甘受し、自分に課せられた任務があるならば生死の間に立つて身を処し、祖国のために生命を捧げる賞悟と決意で戦場に赴いたことは戦後になつても公言しているのである。だが彼が所属した部隊にも派遣された任地にも、その使命を自覚するにたる環境も雰囲気もなかつた。「選ばれて徴用に任じ、誤つて青春に伍す」——彼は戦場にあつてこんな

思いの日々を送っていたのだ。そしてその思いを誰はばかると
なく書き続けたのがこの作品にほかならない。戦後この「遠征篇」が
占領軍によつて「離愁篇」と改題を命ぜられ、これが初めて一冊にま
とめられて刊行（文芸春秋新社 昭27・12）されたとき、著者は「前書
き」で、

この一巻だけは、小説「人生劇場」にとつては、むしろ外篇とい
ふべきものであり、小説的構成は唯、末端の表現の上に加へられ
てゐるだけで、すべて现实生活のあまりにも正確な記録である。
作者はその意味において「離愁篇」の上梓に際し、一切の修正と
加筆を避けた。この作品の発表は、昭和十八年であるが、このや
うな時代と環境の中にあつて、作者がこの作品を書きつづけたこ
とを、もし認識していただくことができるならば、作者にとつて
は望外の喜びである。……「選ばれて徴用に任じ、誤つて青春に
伍す」といふ私の言葉が当時の戦場生活をもつとも的確に表現し
てゐる。今にして思へば、この空白の中に私の人生が埋没してゆ
く過程が「離愁篇」執筆の動機であつたと言へやう。

と述べているが、この作品にこそ軍部へのおもねりも時局への迎合も
ないことだけはたしかである。